

 UENO ZOOLOGICAL GARDENS

上野動物園

サル山の歴史



昭和7年

1932

日本で最初の 「サル山」完成

アカゲザル・カニクイザル・タイワンザル・
ニホンザルの4種類のサルを展示



サル山のモデルは、千葉県富津市にある高岩山（たかごやま）の岩山といわれています。当時の最先端技術を使って作られており、完成してからの92年間、その姿はほとんど変わりませんでした。当時、檻に囲われていない動物舎は画期的であり、その後の日本の動物園の飼育展示に大きな影響をあたえました。高い岩山を駆けのぼる姿や岩から岩へ跳ぶ姿など、ニホンザルの多様な行動や運動能力を観察することのできる施設でもありました。

2024年11月19日。

日本で最初の「サル山」の展示が、

幕を下ろしました。

92年にわたり

上野動物園を見守ってきた

「サル山」の歴史を振り返ります。

昭和20年

第二次世界大戦終結

残っていたサルも徐々に数を減らす

昭和23年

1948

屋久島のニホンザル7頭を導入



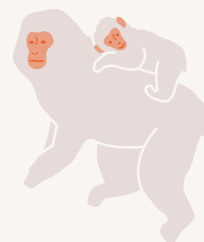
昭和25年

1950

宮崎のニホンザル5頭を導入



屋久島と宮崎から来園したサルは順調に繁殖し、約60年で8世代を重ねました



昭和29年

1954

サルが脱走するため、壁を高くする

この工事中にもサルが逃げたため、後日再び工事に…



昭和40年

1965

擬岩の劣化で大改修

改修後、

展示再開を記念して

「サル山開き」を開催

イベントに際し、サルたちのために遊具やドジョウなどを入れた樽を用意しましたが、サルたちは見向きもしませんでした。



昭和52年

1977

サル山の防火訓練

消防署と合同での訓練をその後何回か実施



平成4年

1992

丸太小屋新設



この丸太小屋は園内の大工が作ったもので、サル山展示終了まで活躍しました。

東側の擬岩が崩れ、補修工事

平成6年

1994

体重計を設置

大規模改修工事

新たにつり橋を設置



平成7年

1995

「ボス」「メスガシラ」の
呼称をやめ、
「第一位オス」「第一位メス」
とする

ニホンザルに「ボス」はいない



初代「ボス」とされたダンジュウロウ
在位期間 1950-1957年

野生のニホンザルは、母子間の血縁関係を中心とした複数のおとなのオスとメス、子どもからなる群れをつくります。

かつて野生のニホンザルの研究が始まった頃、「群れをまとめるボスがいる」という仮説が立てられました。しかしその後、研究が進み、そのような「ボス」は存在しないことが明らかになりました。

そこで上野動物園でも、群れの中で一番力が強い個体のことを、「第一位オス」「第一位メス」と呼ぶことに変更しました。

「ボスはいない」ことを伝えるパンフレット
『ニホンザルのぜかい——「ボス」』(1996)



平成21年

2009

暑さ対策として
スプリンクラーを設置

他の展示施設へ移動

九州由来のニホンザルを全頭捕獲

平成22年

2010

下北半島のニホンザル展示開始



青森県下北半島にすむニホンザルは、ヒトを除くサル
の仲間（霊長類）の中で最も北にすむ「北限のサル」と
して世界的に注目され、国の天然記念物にも指定され
ています。

しかし、2006年にその数が激増し、農業被害が拡大、
人的被害も発生するようになりました。青森県では地
元住民との共存に向けて対策をしてきましたが、2008
年3月に農業被害を起こす個体を対象に一定数を駆
除することが決まりました。

一方、上野動物園では宮崎県と屋久島から計12頭
のニホンザルを導入した後、約60年にわたりその子孫
を飼育してきました。しかし2ヶ所から来ていたため、
野生には存在しない「亜種間の雑種」という群れになっ
ていました。そのため上野動物園では、「種の保存」の
観点から、群れの入れ替えを検討していました。
そして、2009年4月24日、捕獲された23頭の下北
半島のサルが来園したのです。

「カジキ」「アジ」の脱走

いずれも数時間後に捕獲
対策として電柵を設置

高さ4mにもなる壁を登る
野生のニホンザルの運動能力の
高さに驚かされました。



サル山の四季

冬

長い冬毛に変わり、さらに寒いときには身を寄せ合って寒さをしのぎます。



秋

交尾期を迎え、オスたちの自己アピールでにぎやかになる季節です。



夏

短い夏毛にかわります。おとなは日陰に入る一方、子どもたちは活発に遊びます。



春

春は出産の季節。ほぼ毎年、複数の子どもたちが生まれました。



令和元年

2019

アニマルウェルフェア（動物福祉）
への意識の高まり

サル山でのニホンザルの研究

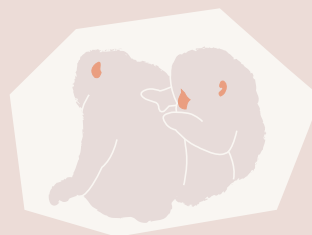
動物園の役割のひとつに「調査・研究」があります。野生では難しい調査でも、動物園のような飼育施設では可能というケースは多くあります。また、調査・研究の結果が、動物園での飼育管理技術の向上につながることはもちろん、野生動物を守る取り組みに役立つこともあります。

ニホンザルを研究する上で重要なことのひとつに、「個体識別」があります。

飼育担当者は数十頭ものサルたちを外見で正確に識別しており、群れの中でのサル同士の関係を観察したり、体重

計に乗った個体を記録したりすることができます。そのため、さまざまな調査をおこなうことが可能なのです。

サル山での研究の一例として、2015年に発表した、ニホンザルのえさの季節変化と体重変動に関する論文を、公式ウェブサイト「東京ゾーネット」でご覧になれます。



www.tokyo-zoo.net

平成23年

2011

サル山80周年
イベント開催

パネル展示やボランティアによるガイドで、ニホンザルの魅力とともにサル山の歴史を伝えました。



令和2年

2020

「さるやまキッチン」
オープン

サル山が東園の無料休憩所の
名称の由来となる



さるやまキッチン
saruyama kitchen



令和3年

2021

体重計を
リニューアル



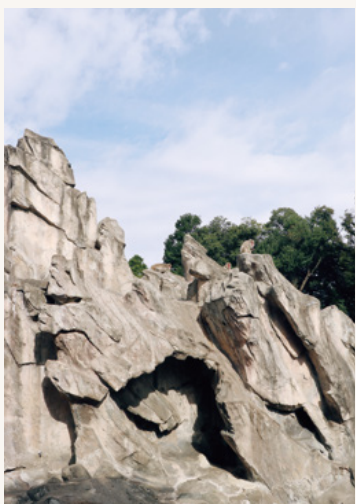
令和6年

2024

新施設計画に着手

老朽化にともない、アニマルウェルフェアに
配慮した新施設計画に着手

全頭捕獲を開始



捕獲が始まりサルの減ったサル山

11月19日、最後の1頭を
非公開施設に移動

サル山展示 終了

92年の歴史の中で、サル山で
飼育されてきたニホンザルは、
400頭以上にのぼります。

上野動物園では、「サル山」での飼育
展示をとおして学んできたことを糧に、
これからもニホンザルにとって
より過ごしやすい環境をつくり、
生き生きとした行動を引き出すことを
目指します。

新しい施設は、そのための工夫を
さまざまに凝らすことで、ニホンザルの
魅力をより一層感じられる場として
生まれ変わる予定です。

「サル山」92年のその先で…
新たなニホンザル展示の歴史が、
始まります。

